21日　金曜

使徒

13:13 パウロの一行は、パポスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。
13:14 二人はペルゲから進んで、ピシディアのアンティオキアにやって来た。そして、安息日に会堂に入って席に着いた。
13:15 律法と預言者たちの書の朗読があった後、会堂司たちは彼らのところに人を行かせて、こう言った。「兄弟たち。あなたがたに、この人たちのために何か奨励のことばがあれば、お話しください。」
13:16 そこでパウロが立ち上がり、手振りで静かにさせてから言った。「イスラエル人の皆さん、ならびに神を恐れる方々、聞いてください。
13:17 この民イスラエルの神は、私たちの父祖たちを選び、民がエジプトの地に滞在していた間にこれを強大にし、御腕を高く上げて、彼らをその地から導き出してくださいました。
13:18 そして約四十年の間、荒野で彼らを耐え忍ばれ、
13:19 カナンの地で七つの異邦の民を滅ぼした後、その地を彼らに相続財産として与えられました。
13:20 約四百五十年の間のことでした。その後、預言者サムエルの時まで、神はさばきつかさたちを与えられました。
13:21 それから彼らが王を求めたので、神は彼らにベニヤミン族の人、キシュの子サウルを四十年間与えられました。
13:22 そしてサウルを退けた後、神は彼らのために王としてダビデを立て、彼について証しして言われました。『わたしは、エッサイの子ダビデを見出した。彼はわたしの心にかなった者で、わたしが望むことをすべて成し遂げる。』
13:23 神は約束にしたがって、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主イエスを送ってくださいました。
13:24 この方が来られる前に、ヨハネがイスラエルのすべての民に、悔い改めのバプテスマをあらかじめ宣べ伝えました。
13:25 ヨハネは、その生涯を終えようとしたとき、こう言いました。『あなたがたは、私をだれだと思っているのですか。私はその方ではありません。見なさい。その方は私の後から来られます。私には、その方の足の履き物のひもを解く値打ちもありません。』
13:26 アブラハムの子孫である兄弟たち、ならびに、あなたがたのうちの神を恐れる方々。この救いのことばは、私たちに送られたのです。
13:27 エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者たちのことばを理解せず、イエスを罪に定めて、預言を成就させました。
13:28 そして、死に値する罪が何も見出せなかったのに、イエスを殺すことをピラトに求めたのです。
13:29 こうして、彼らはイエスについて書かれていることをすべて成し終えた後、イエスを木から降ろして、墓に納めました。
13:30 しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせました。
13:31 イエスは、ご自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人たちに、何日にもわたって現れました。その人たちが今、この民に対してイエスの証人となっています。

Bible Reference 聖書の記述

アンテオケはエルサレムから北へ５００キロほど（愛知県から福島県くらい）、キプロス島はアンテオケから概ね西に２００キロほど海を渡ります（愛知県から神奈川県まで船で行くような距離）。そしてそのキプロス島のパポスからペルガ（今のトルコにある）までは、海を３００キロほど北に行きます。さらにピシデヤのアンテオケは北に１００キロです。一行ははるか遠くに来たと感じたことでしょう。

このアンテオケにもユダヤ人たちは生活しており、会堂を建てて旧約聖書に従い、ユダヤ教徒として生きていました。パウロは旧約聖書の朗読の後に、その聖書に基づいて福音を語ったのです。

福音を伝えるときには、相手を罪人として否定してから語るのではなく、このように共通の理解から始めることも必要です。ここでの共通理解は「神の歴史と救い主の約束」ということです。そしてその理解があればこそ、救い主としておいでになったイエス様を殺したというユダヤ人の罪が明確になるのです。

伝道の限界を自分で決めてしまうことなく、神の聖霊に従って進みましょう。そこには宣教の足がかり（パウロにとってのユダヤ教のように）となるものが備えられており、チャンスに満ちていることでしょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）　②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）　③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）　④この世にあって何を実践しますか？